

大乘

DAIJO 法話

彼岸への道



兵庫・善教寺副住職
あかい ともあき
赤井 智顕

彼岸（彼の岸）とは、迷いの世界（此の岸）に対するさとりの世界。私たちにとっては、阿弥陀さまのお浄土といただく言葉です。お念仏の先人方は、お彼岸のご縁を通して、お浄土へと先立って往かれた、大切な方々を偲んできました。

「見えない世界なんて信じられない」「人間死んだら終わりじゃないか」——そんなことをおっしゃる方がいらつしやるかもしれません。しかし、本当にそうでしょうか。私という人間は、

「電話」と名付けられた一台の電話ボックスが設置されています。震災で会えなくなった家族や友人と、もう一度言葉を交わしたいと願う人々が、この場所を訪ね、電話線のつながっている受話器を通して会話をする。それが「風の電話」です。

「もしもし、じいちゃん？ いま元気？ 僕さ、三学期越したらもう四年生になるよ、早いでしょ」「父さんが死んだ時は、本当にどうしたらいいのかってわかんなかったけど、なんとか今まで生きてきました」

「返事が聞きたいのに聞こえない。ごめん、助けてあげられなくて、ほんとにごめん」

「風の電話」の線はどこにもつながっていません。そこに何も見えません。けれど、私たちは

決して見える世界だけでは生きていきません。大切な人との別れを、きれいさっぱり割り切つて生きていける強い人間でもありません。私たちは見えない世界に支えられ、別れてもなお、つながっていくことのできる世界を大切に、今を生きているのではないのでしょうか。

二〇一六年三月十日、NHKスペシャル「風の電話 残された人々の声」という番組が放映されました。東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県大槌町の海を見下ろす高台に、「風の

その見えない線を通して、大切な人とつながっていくこうとする、そんな想いを抱いて生きているのです。まさに凡情を抱えて生きているのが、まぎれもない私の人生なのです。「風の電話」にささやかれる一人ひとりの心の声に、つよく心を揺さぶられたことでした。

お浄土の世界も私には見ることはできません。けれどお浄土は、今を生きる私のいのちを支えてくださる世界です。そしてお浄土を通して大切な方々とつながっていく、そんなあたたかな世界のあることにも気づかせていただきます。

今から三年ほど前のことでした。ご門徒のご往生の一報を受け、ご葬儀にうかがいました。四十代半ばの女性の方でした。この方には二人のお子さんがいらつしやいました。当時、高校

三年生の息子さんと、小学校五年生のおじょうちゃんでした。深い悲しみのなか、お通夜、ご葬儀を執り行わせていただき、火葬場へと向かいました。火葬場では、息子さんがお母さんの法名を、おじょうちゃんがお母さんの遺影を、両手に抱えて立っていました。そのうち耐え切れなくなったおじょうちゃんが、顔を下へ向け、肩を震わして泣きはじめます。それに気づいたお兄さん、隣の妹さんの肩を自分の方へ引き寄せながら、無言で肩をほんぽんとたたきながら励ましていかれます。けれどお兄さんも、我慢できなくなって一緒に泣きはじめるのです。それを見られたお父さん、すぐに二人のところへ駆け寄られ、後ろから強く抱きしめていかれました。しかし、お父さんも、そのまま膝から地



カット 長井多美栄

面に崩れ落ち、親子三人、体を寄せあって泣いていらっしやいました。やがておじょうちゃんが遺影のお母さんの顔をじっと見つめて、写真の顔のあたりをそつとなでながら言います。

「お母さん、痛かったね。つらかったね。お母さん、今までありがとう」。そして最後に一言、「お母さん、また会おうね」と告げていかれました。最後の言葉が今でも耳に残っています。とても温かい言葉でした。

私たちはおじょうちゃんに向かって、「死んだら終わりだよ」とは言いません。「そうだったね、また会えるんだね」と、一緒にうなずいていきます。また必ず会うことのできる、お浄土の世界を聞かせていただくのが浄土真宗の教えだからです。

別れたくない、まだつながっていたい、そんな想いを抱えながら生きている私たちのために、阿弥陀さまはお浄土を建ててくださいました。そして阿弥陀さまに抱かれ、お浄土へと往き生まれたい方は、「南無（なむ）阿彌陀（あみだ）仏（われに）」の仏さまと一つとなって、私のもとへ還（かえ）ってきてくださっています。私の今と、確かにつながっているのです。

「今日もあなたと一緒にだよ。一緒に生きていこう」。大切な方の願いにつつまれ、お浄土に支えられながら生きていく時、孤独でない安心の人生が開かれていきます。彼岸であるお浄土へと続くただ一つの道、「南無阿彌陀仏」のお念仏の道を、今ここに、私が歩ませていただいているのです。